HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	継承語教育におけるCLILアプローチの可能性 ： 日本在住ロシア語話者の場合［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	Savinykh, Anna
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16040号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92795
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	SAVINYKH_Anna_review.pdf, 審査の要旨



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：サヴィヌィフ・アンナ

審査委員

主査　教授　　パイチャゼ　スヴェトラナ

副査　特任教授　　河合靖

副査　准教授　　横井幸子

学位論文題名

継承語教育におけるCLILアプローチの可能性

―日本在住ロシア語話者の場合―

本論文は、継承語教育の状況（コンテクスト）や内容言語統合型学習のアプローチ（Content and Language Integrated Learning、以降は CLIL）の教育移転に影響すると考えられる人（アクター）について検討し、ロシア語継承語教育への CLIL アプローチの教育移転の種類や現段階を特定し、継承語教育における CLIL アプローチの可能性を明らかにすることを目的としている。先行研究のレビューを通じて、継承語教育における CLIL アプローチが理論的に待望されている一方、それに対するアクターである継承語教師の考えや実践に関する研究が少ないことが分かっている。また、継承語ロシア語話者のロシア語能力に関する研究が多いものの、コンテクストである日本におけるロシア語話者の家庭やロシア学校に関する情報が乏しいと著者は指摘し、学習者である子どもの教育的ニーズを明らかにすることにした。審査委員会においては、本論文の主な学術的貢献として、大きく以下の点について高い評価がなされた。

第一に、サヴィヌィフ氏の研究は、継承語教育の分野における CLIL というアプローチの導入に重点を置いている。1990 年代に始まったグローバリゼーションは、人口の移動の新たな波をもたらした。その結果、親の故郷の外で生まれた子どもたちの人数が増加し、両親の母語の継承語教育は緊急の課題となった。継承語教育の教授法は、母語教育や外国語教育と異なり、現在、親や教師は新たな教授法を求めている。サヴィヌィフの研究は、言語学、教育学、社会学の交差点に位置し、継承語教育の問題点についての理解を深めるとともに、その教授法の開発に大きく貢献した。

第二に、この研究は理論だけではなく、具体事例で扱われる資料的価値が高い点である。サヴィヌィフ氏は日本の多くの「ロシア語学校」における継承語教育の状況に関するデータを収

集・分析しただけでなく、札幌のロシア語学校で教鞭をとりながら、5 年間にわたり CLIL アプローチを実践し、この結果を分析した。

第三に、本研究においては、西欧、ロシア、日本における CLIL 研究及びその周辺の関連研究を幅広く網羅、統合し、丁寧に研究成果と課題を抽出した上で研究が設計、遂行されており、これまで様々な問題が個別に取り扱われがちであった日本における継承語としてのロシア語教育の全容を描き出し、実証的知見を提出できた点で、日本でロシア語を話す子どもたちへの継承語教育に大きな貢献をもたらしうる研究であると言える。

一方で、口頭試問においては、審査員から以下のような質問をされ、本論文の課題についても指摘がなされた。

第一に、本研究は教育学移転の概念を使用し、日本語で「教育移転」という概念はまだ普及していないことを強調しているが、日本における教育学の分野で教育移転の概念は、比較教育学において、国の間で教育学システムが移転する研究において広く使用されている。この概念を CLILL アプローチに適用するためには、より詳細な説明と先行研究との関連付けが必要であると指摘された。

第二に、第２言語教育研究においてロシアと西欧でそれぞれ異なる研究潮流が形成されてきたことに起因する、研究方法論、論文の構成や用語の定義など、多岐にわたる「擦り合わせ」の手続きに関する質問があった。続いて、本研究の一部で用いられた量的分析方法について課題と改善点の説明が求められた。

上記のコメントに加え、以下の質問もされた。

本研究において継承語教育に CLIL を導入する点は新規性として評価が高いが、CLIL の研究に対する本研究の貢献として、何が考えられるのか。また、教育実践者主導のボトムアップ的な CLIL の移転の傾向が、本調査で明らかになったとされるが、その場合に、カリキュラム、教育内容は、受け入れ地側と出身地側のどちらを（あるいは第三の選択肢を）選ぶ方向に向かうと予想するのか。なお、継承語教育のアクターとして親や教師を取り上げたが、教育される子どもたちは、結果としてどのような言語能力なりアイデンティティを身に着けるだろうか。また、それは親や教師の希望と齟齬がある場合も出ると思うが、それに対する考えはあるのか。

口頭試問で指摘されたいずれの質問やコメントに対しても、サヴィヌィフ氏から真摯な回答がなされた。このことは、サヴィヌィフ氏が長期にわたる調査や内容言語統合型学習のアプローチの理論的な展開を追求する上で、本論文の限界性や今後の課題を意識しながら博士論文を取りまとめたことを示していると言える。

以上を踏まえて、審査委員会では本論文が博士学位論文に求められている水準を満たしていると判断し、博士（学術）学位の授与に値するものとして、本論文を合格とした。